



みつけよう！
野田の**魅力**あふれる

植物図鑑



表紙の写真について



- ① いっせいに咲くムラサキサギゴケ
- ② クラウンシャイネス (※)
- ③ 黄色く色づいたイロハモミジ
- ④ ムシクサの虫こぶの中で育ったゾウムシ
- ⑤ 11枚葉のシロツメクサ
- ⑥ ハキダメギクの茎の皮を突き破って成長した氷
- ⑦ 冬のイチョウ
- ⑧ 紅葉した土手のチガヤ

p32

p121

p72

p103

p27

※クラウンシャイネス

森林の木々はお互いに重ならないように枝を伸ばす。

そのため、下から見上げると木々の枝の広がり Zigzag パズルのように見える。

中学生の皆さんへ

皆さんは、野田市にどのくらいの種類の植物があるか、知っていますか？ 100種、500種、1000種…？

実は、私も答えを知りません。さまざまな生物が暮らしていく環境を守るための取り組み「生物多様性の保全」をしている野田市には、皆さんの想像以上に、たくさんの植物が暮らしています。

この本は、野田市の豊かな自然をPRする活動をしている岩槻秀明さん（通称わぴちゃん）を中心に、市内で見られる多様な植物を皆さんに知ってもらいたいという思いから作られました。ぜひ、この本を片手に、身近な植物を観察してみてください。見た目から植物を探しやすい工夫がしてあります。

皆さんが今まで知らなかった植物のことがわかるかもしれません。身近な植物の意外な姿に驚くかもしれません。そのような体験を通して、野田市の自然の魅力を実感してください。もちろん掲載していない植物もたくさんありますので、皆さんの手でさらに調べてみてください。そして、この本が、豊かな自然環境や生物多様性の保全の視点を持つ助けになることを願っています。

野田市の自然を守っていけるかは、未来を担う皆さんの手にかかっています。皆さんの今後の活躍に期待しています。

野田市長 鈴木 有

この本の使いかた

1 写真もくじで植物を探そう



花の色、葉の形、タネの様子、その他の特徴から植物を探ることができます。
※葉やタネのもくじは、分かりやすい特徴があるものだけ載せています。

花の色	白、赤、紫、青、黄、だいだい、緑、茶
葉の形	「ギザギザと切れ込む形」「手のひらのような形」「3枚ずつつく」「羽根のようなつきかた」「耳のような部分がある」
タネ	「綿毛つき」「服にくっつきやすい」「どんぐり」「豆」「色が鮮やか」「翼が目立つ」「タネを弾き飛ばす」
その他	「胞子で増える」「つるで広がる」「刺がある」「水に浮かぶ」「水の中で育つ」「他と違ったにおい」「タネがとても臭い」「傷つけると白い汁が出る」「花は夜に咲く」

写真の右下にある数字が詳しく調べるページです。

2 詳しく調べてみよう

〇〇科〇〇属は、植物の分類上の位置づけです。科名はDNA解析をもとにした新しい分類のしかた（APG分類体系）で書いてあります。そのため、少し前に出版された図鑑とは違うことがあります。日本語名の下にある英語のようなものは学名です。学名は世界共通の名前で、ラテン語という言語で書かれています。

※日本にもとからある在来種は緑色、海外からやってきた外来種は青色で書いてあります。

▼自生環境

植物が生えている可能性がある環境について、主なものを書いています。

▼原産地

原産地は、もともと自然に生えている国や地域のことです。外来種の場合、どこから来たのか原産地を書いてあります。

植物に関する解説です。

生態系被害防止外来種リストやレッドリスト（環境省または千葉県）に当てはまる場合、この部分にアイコンで記してあります。生態系被害防止外来種リストは138ページ、レッドリストは139ページも見てください。

在来種の場合は数を減らす原因となるものについて、外来種の場合は増える可能性がある影響について、それぞれアイコンで記してあります。ここに記したものは主なもののみです。どんなアイコンがあるかは、138～139ページの一覧を見てください。

市内で分布が確認できている地域を、地図の中に赤く記しています。赤色ではない場所でも、ていねいに探すと見つけれられるかもしれません。

※数の少ない植物の場合は、多くの人に知られてしまうと自生地が荒らされてしまう可能性があるため、場所をふせてあります。

植物に関する豆知識を書いています。

植物のさまざまな姿を写真で紹介しています。

自然観察に出かけよう

図鑑や参考書には、自然に関するさまざまな情報が詳しく書かれています。最近は、インターネットも自由に使えるようになり、家にいながらたくさんの情報を、一度に手に入れることができるようになりました。

しかし、やはり自然のことを学びたいと思ったら、実際に外に出て、実物を観察するのが一番です。図鑑やインターネットに書かれていることは、実物そのものではなく、あくまでもそれを作った人がまとめたレポートにすぎません。紙面の都合上、すべての情報を載

せきれているわけではなく、もしかしたら間違いもあるかもしれません。

野外に出て、自分なりに観察することで、新たな情報をたくさん得ることができます。自然のことを調べようと思ったら、できる限り外に出て実物に触れるようにしたいものです。そして、観察結果をまとめるとき、図鑑やインターネットはその「サポート役」として、大きな力を発揮してくれることでしょう。

なお、自然観察での注意点を箇条書きでまとめておきます。出かけるときに確認しましょう。

自然観察をするときの注意点

長そで長ズボンで帽子をかぶりましょう。夏で茂みに入らないときは、半そででも大丈夫です。

履きなれた運動靴を基本とし、茂みや水辺に行くときは長靴を履きましょう。

道ばたで自然観察をするときは、車や自転車に気をつけましょう。

足場の悪い場所には行かないようにしましょう。また、水辺で自然観察をするときは、必ず大人と一緒に行きましょう。

茂みの中にはどんな生物がひそんでいるか分からないので、勢いよく中に入ることはやめましょう。

立ち入り禁止となっている場所には、入らないようにしましょう。

暑さが厳しいときは、こまめに水分補給するなど、熱中症に気をつけましょう。また、少しでも体調に異変を感じたら、すぐに休憩しましょう。

大雨や台風接近、強風などの予報が出ているときの観察はやめましょう。また、活動中に雷の音が聞こえてきたら、すぐに建物の中に避難しましょう。

生物多様性ってなんだろう？

野田市は「生物多様性のだ戦略」を決め、コウノトリもすめるような自然豊かなまちを目指しています。私たちが暮らす地球には、海、山、川、野原などさまざまな環境の場所があり（生態系の多様性）、それぞれの場所に数えきれないほどたくさんの種類（種間多様性）の生きものが暮らしています。

このように、さまざまな環境の中にさまざまな種類の生きものが暮らしていることを「生物多様性」と言います。そして、これら多様な生きものの営みの中で、私たち人間の命も維持することができているのです。

また、最近は種類にとどまらず、遺伝子の多様性も注目されています。例えば、私たち人間は、分類学上すべて同じヒト（ホモ・サピエンス）という種類になりますが、ひとりひとり個性があります。これは生きものの世

界でも同じで、同じ種類の中にもわずかな遺伝子の違いからさまざまな個性があります（種内多様性）。

つまり、生物多様性は、

●生態系の多様性

…生きものが暮らす環境の多様性

●種間多様性

…生きものの種類の多様性

●種内多様性

…同じ種類の中での遺伝子の多様性

この3つから成り立っています。そして、生物多様性を失ってしまうと、元に戻すのはほぼ不可能です。当然、私たちの生活にもとても大きな影響があります。取り返しのつかないことになる前に、生物多様性をどう守っていくのかしっかり考えていかなければならないのです。

写真もくじ

花の色、葉、果実などを手がかりに、
調べたい植物を写真から探すことができます。

花の色で探す



イトトリゲモ 29



オシロイバナ 41



オモダカ 45



オランダ
ミミナグサ 46



カラスウリ 52



コセンダングサ 62
(シロセンダングサ)



コハコベ 66



シロツメクサ 72



スズメノ
エンドウ 76



セリ 82



タコノアシ 83



タネツケバナ 84



ドクダミ 89



ナズナ 91



ニラ 93



ニワゼキショウ 94



ノイバラ 97



ハキダメギク 103



ハルジオン 106



ヒメジョオン 110



ヘクソカズラ 113



ミチタネツケバナ 120



ムシクサ 121



モトタカサブロウ 125



ヤツデ 127



ヤナギタデ 128



ヤマノイモ 131



ヤマユリ 132



ユウゲショウ 133



ヨウシュヤマゴボウ 134

花の色で探す

赤



アカツメクサ **23**



アメリカ
オニアザミ **26**



イヌタデ **30**



イヌノフグリ **31**



イロハモミジ **32**



オシロイバナ **41**



カラスノ
エンドウ **53**



クズ **59**



コニシキソウ **65**



スズメノ
カタビラ **77**



ヌスビトハギ **95**



ネジバナ **96**



ノダアカバナ **100**



ハス **104**



ハルジオン **106**



ヒガンバナ **107**



ヒメオドリコソウ **109**



ヒルガオ **111**



ヘクソカズラ **113**



ホトケノザ **115**



ミゾソバ **119**



ヤブツバキ **130**



ユウゲショウ **133**



ワタラセツリフネソウ **137**

花の色で探す



カントウヨメナ **56**



スミレ **79**



ツルマメ **87**



トキワハゼ **88**



ニワゼキショウ **94**



フジ **112**



ムラサキシキブ **122**

花の色で探す



青



オオイヌノフグリ

34



キュウリグサ

58



コナギ

63



ツクサ

86



ノビル

101



マルバツクサ

117



ミゾコウジュ

118

花の色で探す



黄



アキノゲシ

25



オオジバリ

36



オシロイバナ

41



オニタビラコ

42



オニノゲシ

43



外来タンポポ
种群

47



カタバミ

48



ガマ

50



カントウ
タンポポ

55



カントウヨメナ

56



キヅタ

57



コセンダングサ

62



シュロ

68



シロダモ

71



セイトカ
アワダチソウ

80



ドクダミ

89



ナノハナの
仲間

92



ノゲシ

99



ノボロギク

102



ハキダメギク

103



ハハコグサ

105



ヘビイチゴ

114



マテバシイ

116



メマツヨイグサ 124

花の色で探す



ナガミヒナゲシ 90



ヤブカラシ 129

花の色で探す



アキノ
エノコグサ 24



イチヨウ 27



エノコグサ 33



オオバノ
トンボソウ 38



オオブタクサ 39



オヒシバ 44



カナムグラ 49



ガマ 50



カラスビシャク 54



クヌギ 60



ケヤキ 61



コナラ

64



ジュズダマ

67



シラカシ

69



シロザ

70



スズメノ
テッポウ

78



ヒナタ
イノコヅチ

108



メヒシバ

123



ヤエムグラ

126



ヤブカラシ

129



オオオナモミ

35



オオバコ

37



オギ

40



カヤツリグサ

51



スイバ

73



ススキ

75



セイバン
モロコシ

81



チカラシバ

85



ヨシ

135



ヨモギ

136

葉の形で探す



ギザギザと
切れ込む形



アキノノゲシ

25



アメリカ
オニアザミ

26



オニタビラコ

42



オニノゲシ

43



外来タンポポ
種群

47



カントウ
タンポポ

55



ナガミヒナゲシ

90



ナズナ

91



ナノハナの
仲間

92



ノゲシ

99



ノボロギク

102

葉の形で探す



手のひらのような形



イロハモミジ 32



オオブタクサ 39



カナムグラ 49



カラスウリ 52



キツタ 57



シュロ 68



ヤツデ 127

葉の形で探す



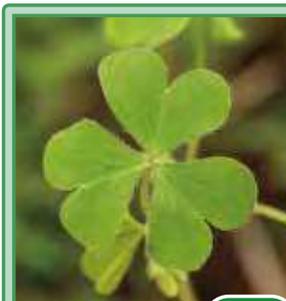
3枚ずつつく (3つ葉)



ヤブカラシ 129



アカツメクサ 23



カタバミ 48



カラスビシャク 54



クズ 59



シロツメクサ 72



ツルマメ 87



ヌスビトハギ **95**



ヘビイチゴ **114**

葉の形で探す



羽根のような
つきかた



カラスノ
エンドウ **53**



スズメノ
エンドウ **76**



タネツケバナ **84**



ノイバラ **97**



フジ **112**



ミチタネツケ
バナ **120**

葉の形で探す



耳のような
部分がある



オモダカ **45**



スイバ **73**



ナノハナの
仲間 **92**



ノゲシ **99**



ヒルガオ **111**

細長い葉の草



細長い葉を
つける草は、
イネ科やカヤ
ツリグサ科
の仲間かも。
花や果実の
あるときに調
べてみよう。

タネから探す



綿毛つき



アキノノゲシ 25



アメリカ
オニアザミ 26



オオジシバリ 36



オギ 40



オニタビラコ 42



オニノゲシ 43



外来タンポポ
種群 47



ガマ 50



カントウ
タンポポ 55



ススキ 75



セイタカ
アワダチソウ 80



ノゲシ 99



ノダアカバナ 100



ノボロギク 102



ハキダメギク 103



ハハコグサ

105



ハルジオン

106



ヒメジョオン

110



ヨシ

135

タネから探す



服にくっつき
やすい



オオオナモミ

35



コセンダングサ

62



ヌスビトハギ

95



ヒナタ
イノコヅチ

108



ヤエムグラ

126

タネから探す



どんぐり



クヌギ

60



コナラ

64



シラカシ

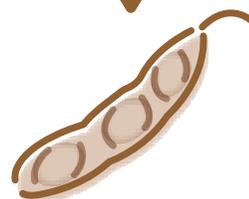
69



マテバシイ

116

タネから探す



豆



カラスノ
エンドウ

53



クズ

59



スズメノ
エンドウ

76



ツルマメ

87



ヌスビトハギ

95



フジ

112



カラスウリ

52



キツタ

57



シロダモ

71



ノイバラ

97



ヘビイチゴ

114



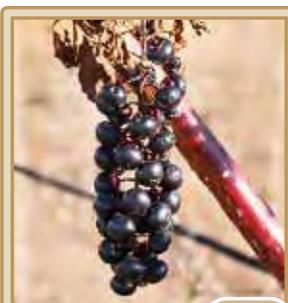
ムラサキシキブ

122



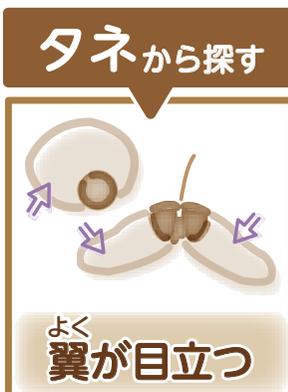
ヤツデ

127



ヨウシュ
ヤマゴボウ

134





イロハモミジ **32**



オモダカ **45**



スイバ **73**



ヤマノイモ **131**

タネから探す



タネを
弾き飛ばす



カタバミ **48**



カラスノ
エンドウ **53**



スズメノ
エンドウ **76**



スミレ **79**



タネツケバナ **84**



ツルマメ **87**



フジ **112**



ミチ
タネツケバナ **120**



ワタラセ
ツリフネソウ **137**



その他の特徴

ほうし
胞子で
増える



イチョウ
ウキゴケ

28



スギナ

74



ノキシノブ

98

その他の特徴

つるで
広がる



カナムグラ

49



カラスウリ

52



キツタ

57



クズ

59



ツルマメ

87



ヒルガオ

111



フジ

112



ヘクソカズラ

113



ヤエムグラ

126



ヤブカラシ

129



ヤマノイモ

131

その他の特徴

刺がある



アメリカ
オニアザミ

26



オニノゲシ

43



カナムグラ

49



ノイバラ

97



ミゾソバ

119

その他の特徴

水に浮かぶ



アオウキクサ

22



イチヨウ
ウキゴケ

28

その他の特徴

水の中で
育つ

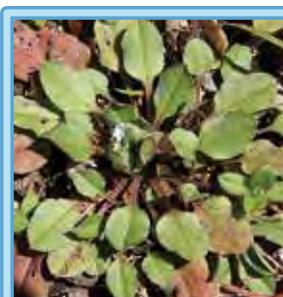


イトトリゲモ

29

その他の特徴

他と
違った
におい



キュウリグサ

58



セリ

82



ドクダミ

89



ニラ

93



ノビル

101



ヘクソカズラ

113

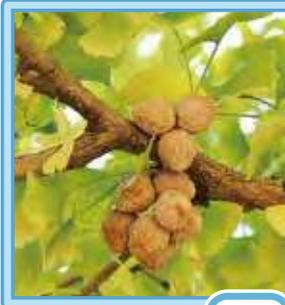


ヨモギ

136

その他の特徴

タネが
とても臭い



イチヨウ

27

その他の特徴

傷つけると
白い汁が
出る



アキノノゲシ

25



オオジシバリ

36



オニタビラコ

42



外来タンポポ
種群

47



カントウ
タンポポ

55

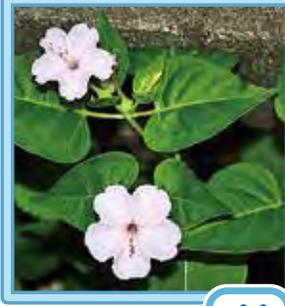


コニシキソウ

65

その他の特徴

花は
夜に咲く



オシロイバナ

41



カラスウリ

52



メマツヨイグサ

124

サトイモ科 アオウキクサ属

アオウキクサ (青浮草)

Lemna aoukikusa Beppu et Murata

自生環境

水田、池や沼 など

原産地

日本在来

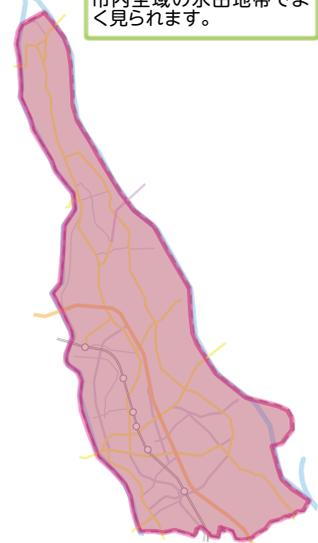
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

とても丈夫で数も多く、今のところ絶滅の心配はありません。ただ、水辺環境の変化が思いがけない急減につながる可能性もあるので、長期的な個体数の増減には留意が必要です。

市内の分布状況

市内全域の水田地帯でよく見られます。



特徴

- ☆ 水田や水路、池などの比較的水深が浅くて、流れがほとんどないような場所に多く見られます。日本固有種ですが、ウキクサの仲間では最もよく見られる種類です。
- ☆ 楕円形の葉のような体（葉状体）をしていて、水面に浮かびながら生活しています。新しい葉状体を次々とつくりながら増えていき、短期間で水面を覆いつくしてしまうほどの繁殖力を持っています。1枚の葉状体に根は1本です。
- ☆ 本種は1年草で、夏に開花・結実してタネをつくった後、稲刈りの頃には枯れてしまいます。タネの状態を冬越し、翌年、水田に水が入ると発芽します。花には雄花と雌花があり、雄花は雄しべ2個、雌花は雌しべ1個です。

水面を漂う植物

水辺に生える植物の生活スタイルにはいくつかのパターンが存在します。アオウキクサのように土の中に根を張らず、体全部が水面を漂うスタイルの植物を浮遊植物と言います。スイレンやアサザ、ヒシなども、水面に葉を浮かべますが、これらはアオウキクサとは違い、水底の土の中にしっかりと根を下ろしています。このような植物を浮葉植物と言います。



マメ科 シャジクソウ属

アカツメクサ (赤詰草)

Trifolium pratense L.

自生環境

土手、公園、造成地 など

原産地

ヨーロッパ

予想される被害



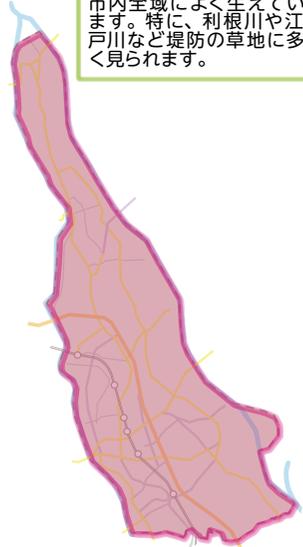
日当たりの良い草原を好むため、同じような環境に生える、他の植物の生育場所を奪ってしまう可能性があります。

特徴

- ☆ シロツメクサと同じ仲間ですが、葉は大きく、茎は立ち上がります。茎の先端に赤紫色の丸い花の穂が付きます。英語では、シロツメクサのホワイトクローバーに対し、アカツメクサはレッドクローバーと言います。花期は長く、春から秋にかけて咲き続けます。
- ☆ 市内では、新しく土地を造成した場所や、土手の草地に特に多く見られます。モンキチョウやベニシジミなど、さまざまな昆虫が花の蜜や花粉を求めてやってきます。
- ☆ 葉に模様が入る株がありますが、その模様は株ごとに微妙に異なります。また、花色は赤紫色が基本ですが、その濃淡や色調は株によってだいぶ異なります。4つ葉もできますが、シロツメクサのそれと比べとはるかにレアなものです。

市内の分布状況

市内全域によく生えています。特に、利根川や江戸川など堤防の草地に多く見られます。



赤詰草なのに白い花？

アカツメクサ（ムラサキツメクサ）は、シロツメクサの仲間で赤紫色の花を咲かせることが名前の由来になっています。しかし、たまに白い花を咲かせる株も存在し、市内でも見ることができます。これをシロバナアカツメクサ、またはセツカツメクサと言います。アカツメクサなのに白花とはなんと紛らわしいのですが、花色が違うだけで他の特徴はアカツメクサと同じです。

1つ1つの花は
ちようけい か
蝶形花と呼ばれる形

花は茎の先に
丸く集まってつく

花の下に
葉がある

果実はがくの中にできる

花の後も
枯れた花びらは
いつまでも残る

白い花を
咲かせる

品種

セツカツメクサ

イネ科 エノコログサ属

アキノエノコログサ (秋の狗尾草)

Setaria faberi R.A.W.Herrm.

自生環境

道ばた、野原、畑地 など

原産地

日本在来

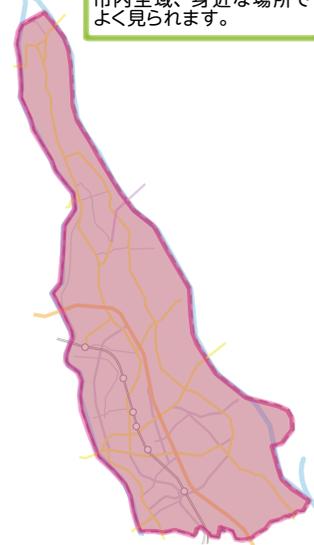
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に育つ野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所でもよく見られます。



特徴

- ☆ いわゆる「ねこじゃらし」のひとつです。図鑑などには「ねこじゃらし」の代表種はエノコログサと書かれていますが、圧倒的に数が多く、身近な場所で目につくのはアキノエノコログサです。
- ☆ 1年草で、エノコログサ (p33) に比べると穂の出る時期は少し遅めで、本格的な花期はお盆以降です。エノコログサに比べると草丈は高くなり、数十cmくらいになることもあります。また、茎もよく枝分かれます。
- ☆ 花の穂はエノコログサよりも太くて長く、ゆるやかに垂れ下がります。穂の剛毛は緑色ですが、ときに紫色がかかる個体も見られます。最大の違いは小穂(しょうすい・穂のツブツブ)です。アキノエノコログサは、外側の皮が少し短いため、先がむけて見えます。エノコログサは外側の皮が上まであり、むけて見えません。

大きくなって帰ってきた

アキノエノコログサは、日本をはじめとする東アジアに広く分布します。1930年代に輸入雑穀とともにアメリカに渡り、現地で「アジア原産の外来雑草」として繁茂しています。そして、今度は、輸入飼料に混入する形で、アメリカ産アキノエノコログサが日本に入ってきているようです。アメリカ産アキノエノコログサは日本のものよりもはるかに草丈が高く、穂の長さも2倍はあると言います。



エノコログサよりも穂が太くて長くゆるやかに垂れることが多い



外側の皮が少し短く先がむけて見える

外側の皮



穂の剛毛が赤紫色のものもある



穂の剛毛は枯れた後もそのまま残る

寒くなってから出てくる穂は短くなることも

冬が近づくとしばしば紅葉する

キク科 アキノノゲシ属

アキノノゲシ (秋の野罌粟)

Lactuca indica L.

自生環境

野原、荒れ地 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

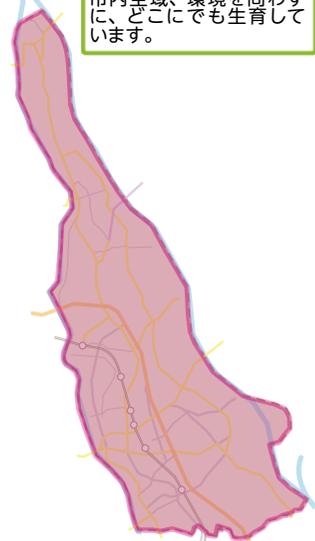
身近な場所でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

特徴

- ☆ 日当たりの良い乾燥した場所に多く生え、とても背が高くなる草です。花の頃は草丈が 2m 近くになることも多く、他の植物から抜きんでてよく目立ちます。一方で、草刈りの影響を受けると、背が低いまま花を咲かせることもあります。
- ☆ 「秋の」と名がつくとおり、開花は9~11月頃です。花後、結実するとその株は枯れてしまいます。秋に開花に至らなかった小さい株はそのまま越冬し、翌年の秋に開花・結実します。
- ☆ 葉はギザギザしているのが普通ですが、ときにギザギザしない葉をつける株もあります。これをホソバアキノノゲシと言います。また、鳥の餌用に野生株から選別されたリュウゼツサイと言う栽培品種があり、こちらは葉の幅が広くて、かなり大きく育ちます。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずに、どこにでも生育しています。



レタスと同じ仲間

サラダ用の葉もの野菜のツートップとして並べて挙げられることの多いキャベツとレタス。しかし、両者は分類学上同じ仲間ではなく、まったく別の植物です。キャベツはアブラナ科の植物で、春に黄色い菜の花に似た花を咲かせます。一方のレタスは、キク科アキノノゲシ属に分類され、収穫しないでいると茎が伸びてどんどん枝分かれし、黄色いタンポポのような花を多数咲かせます。



秋になると茎の先にたくさんの花を咲かせる



花は薄い黄色で小さなタンポポのような形

タネは綿毛がついていて風とともに遠くに運ばれる



葉はギザギザとしていることが多い



葉は細長くて切れ込まない

品種
ホソバ
アキノノゲシ

キク科 アザミ属

総合対策
(その他)

アメリカオニアザミ (アメリカ鬼薊)

Cirsium vulgare (Savi) Ten.

自生環境

道ばた、荒地 など

原産地

ヨーロッパ

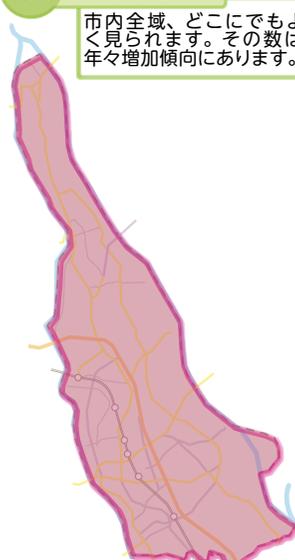
予想される被害



草全体に非常に鋭い刺を持つため、うっかり触るとケガをします。素手で触れるレベルではありません。また、1株から莫大な数のタネができるため、繁殖力も相当なものです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。その数は年々増加傾向にあります。



特徴

- ☆ ヨーロッパ原産の越年草で、世界中に広がっています。日本では 1960 年代に北海道で初めて発見されました。現在は、九州・沖縄を除いた広範囲に定着し、市内でもいたるところでよく見られるようになりました。
- ☆ 全草に針のように鋭い刺が多く、花がきれいだからとつかつに手を出すと痛い目に遭います。また、道ばたにあるものは、わきを通り抜ける際にケガをするおそれがあります。発芽して間もない株にもしっかりと刺はあり、つかつに触るとちくんときます。
- ☆ 環境適応力が強い上に、綿毛つきのタネを大量にまき散らし、鋭い刺で動物も食べないため、どんどん増えています。北海道では利尻島などの自然豊かな場所にもたくさん入り込んでいて、在来の生態系への影響が心配されています。

アメリカだけど欧州原産

アメリカオニアザミ、名前からアメリカ大陸の原産かと思いきや、もとはヨーロッパの植物です。ただ、繁殖力の強さから、温帯を中心に世界中に広がっています。日本には、北アメリカから輸入された穀物や牧草に混じって渡来したと言われていいます。名前もそこから来ているのでしょうか。セイヨウオニアザミという名前もあるのですが、あまり定着せず、現在もアメリカオニアザミが標準名です。



薄い赤紫色の花をたくさん咲かせ遠くからでもよく目立つ

総苞片

針のように鋭い総苞片がびっしりととても触れない



綿毛のついたタネを大量に飛ばす



発芽して間もない株でももうすでに刺は鋭く痛い



冬越し中のロゼット葉は黒っぽい緑色で白い毛に覆われている

イチョウ科 イチョウ属

イチョウ (銀杏)

Ginkgo biloba L.

自生環境

植栽 (公園・街路 など)

原産地

中国

予想される被害

{今のところ特になし}

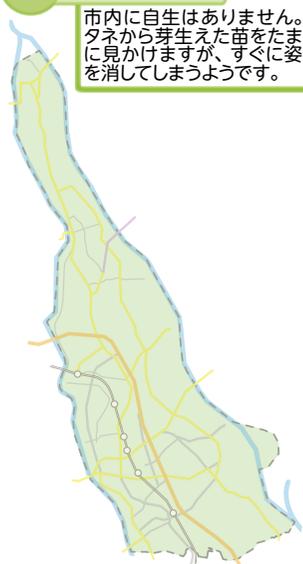
国内には自生はなく、すべて人の手によって植えられたものです。タネから育った幼木があちこちに見られますが、今のところ地域の生態系に影響を及ぼすほどではありません。

特徴

- ☆ 黄色に色づくイチョウの木々は、カエデの紅葉とともに晩秋の風物詩として定番です。しかし、イチョウは日本在来種ではなく、鎌倉時代に中国より渡来し、人々の手によって植えられながら広まっていったものです。
- ☆ 街路樹は剪定によって樹高が抑えられていますが、本来は30m以上にもなる樹種です。また、とても寿命の長い木で、各地に天然記念物となる古木・巨木が多数知られています。ある程度樹齢を重ねると、乳と呼ばれる気根が垂れ下がります。
- ☆ 雌雄別株で、秋にいわゆる銀杏(ぎんなん)ができるのは雌株です。銀杏は種子で、外側の皮はぶよぶよに膨らんで悪臭を放ちます。その中に白くて硬い殻(中種皮)に包まれたものがあり、食用にするのはその中身です。ただ、毒性があるため、大量に食べると中毒を起こす可能性があります。

市内の分布状況

市内に自生はありません。タネから芽生えた苗をたまたま見かけますが、すぐに姿を消してしまうようです。



人のおかげで生き残った?

普段何気なく目にするイチョウですが、実は地球上を恐竜が闊歩していた時代から、ほとんど姿を変えていない「生きた化石」です。しかも野生のものはすでに絶滅し、今や人々の手によって植えられたものだけが生き残っているという状態です。もし人々が、こうやって街路樹などに利用しなければ、とっくに息絶えていて、化石のみ知る存在になっていたかもしれません。



雄花

↑
たくさんの雄しべが穂になってつく

↑
雌花

↑
種子になる部分が2個つく

↑
種子

↑
外側はぶよぶよで臭く中に硬い殻に包まれた「ぎんなん」が入っている



↑
葉は扇形で真ん中に深い切れ込みがある



↑
秋の終わりに黄葉する



↑
樹齢を重ねた木によく見られる

乳(気根)

↑
ちち

↑
冬芽は丸い形



↑
短枝という短い枝がある

↑
たんし短枝

気根…土の上に出る根のこと。

ウキゴケ科 イチョウウキゴケ属

イチョウウキゴケ (銀杏浮苔)

Ricciocarpus natans (L.) Corda

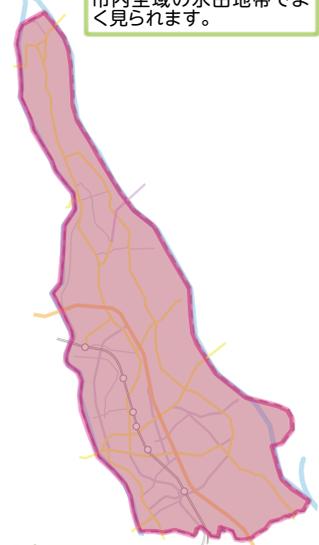
のぼろ
しほり
すて

千葉県



市内の分布状況

市内全域の水田地帯でよく見られます。



自生環境

水田 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



今のところ、野田市内の水田にはたくさん生えています。ただ、全国的に見ると、除草剤や乾田化などの影響で数を減らしつつあるようです。

特徴

- ☆ 水田とその周辺に多く、水面に浮かんだ状態で生育しています。ただ、冬の乾田化が進み、除草剤が普及した今、全国的に数は少なくなっています。
- ☆ 水面に浮かんでいる葉のような部分（葉状体）は緑色で、二又に分かれ、まるでイチョウの葉を連想させるような形をしています。新しい葉状体を次々とつくりながら増え、通常は数個が丸く集まった状態になっています。
- ☆ コケ植物なので花は咲きません。種子ではなく胞子で増えていきます。また、体は根・茎・葉の区別がはっきりせず、葉状体の裏側は根のようなものもじゃもじゃ生えています。根はなく、体全体で水を吸収します。

水陸両用のコケ

イチョウウキゴケは、水が完全になくとも生育可能です。水があるときの葉状体は分厚くてよく浮きますが、水がなくなると葉状体は薄くなり、土の上に丸くべったりと張りついたような状態になります。水量に応じて体を変化させ、水陸両方に対応できるようになっているのです。とはいえ限界があり、完全に土が乾燥してしまうと、干からびて枯れてしまいます。



数個の葉状体が半円～円の形に集まることが多い



水がなくなっても陸上で生育できる

陸上のものはゼニゴケに似ているが丸くまとまる傾向がある

体の形がイチョウの葉に似ている



トチカガミ科 イバラモ属

イトトリゲモ (糸鳥毛藻)

Najas gracillima (A. Braun ex Engelm.) Magnus



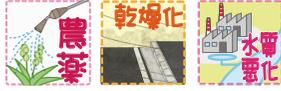
自生環境

水田、ため池 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



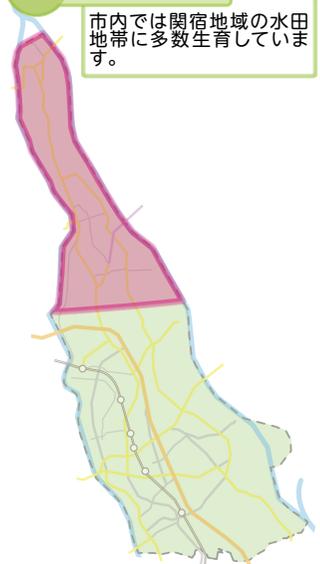
除草剤や水田管理法の変化（特に水を抜く時期）によって、全国的に激減しました。市内の自生地では、水田がこのまま維持されている限りは、特に問題はありません。

特徴

- ☆ 水田やため池に生える 1 年草です。株の寿命は短く、6～7 月頃に発芽した後、短期間で開花・結実を済ませ、稲刈り前にはタネを残して枯れてしまいます。
- ☆ 水底の泥の中に根を下ろしますが、まるで藻のように、一生を水中で過ごします。莖はすぐにちぎれますが、ちぎれてもそのまま生育可能です。ただ、乾燥には極端に弱く、水から出した途端に傷んでしまいます。そのため、タネを残す前に田の水が落ちると、次世代に命をつなげずに絶える原因となります。
- ☆ 葉のわきに雄花が 1 個、雌花が 2 個、同時につきます。タネは薄い果皮に包まれた状態で通常 2 個ずつつきます。果皮をむいたタネには、横長の網目模様がありますが、この模様はトリゲモの仲間の重要な識別点のひとつです。

市内の分布状況

市内では関宿地域の水田地帯に多数生育しています。



藻のようだけど藻ではない

イトトリゲモは、名前に「藻」とつく上に、植物体が水中にあるため、一見すると藻類（いわゆる藻のこ）のように感じてしまいます。しかし、目立たないながらも、きちんと花を咲かせタネで増えるれっきとした「種子植物」です。実は藻類は、胞子で増えます。なお、一生を水中で過ごし、藻のように見える植物のことを「沈水植物」と言います。



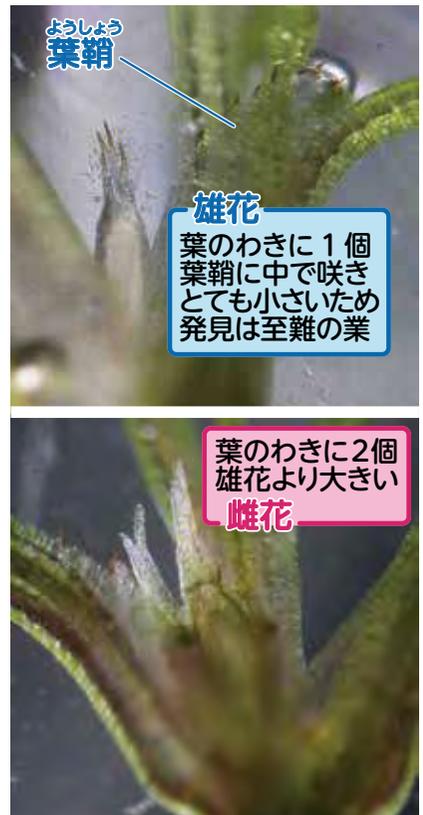
夏の田んぼに生え
水の中で育つ



葉は細くて
縁は少し
ギザギザする

果実は
葉のわきに
通常
2 個ずつつく

タネの表面は網模様
網目は細長い形



ようしょう
葉鞘

雄花

葉のわきに 1 個
葉鞘の中で咲き
とても小さいため
発見は至難の業

雌花

葉のわきに 2 個
雄花より大きい

タデ科 イヌタデ属

イヌタデ (犬蓼)

Persicaria longisetata (Bruijn) Kitag.

自生環境

道ばた、野原、あぜ など

原産地

日本在来

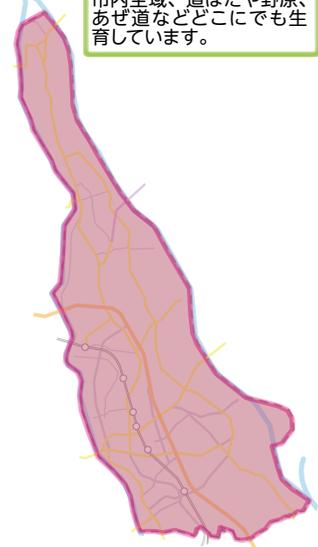
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、道ばたや野原、あぜ道などどこにでも生育しています。



特徴

- ☆ 道ばたや野原など、日当たりの良い場所によく生える 1 年草です。早いものは 6 月頃から穂を出し始めますが、本格的な花のシーズンは秋になってからです。最盛期には赤紫色の花のじゅうたんとなって見応えがあります。
- ☆ 白い花を咲かせるシロバナイヌタデ、草丈が 10cm くらいのミニチュアサイズのイザリタデ、縮れた光沢のある葉をつけるウズタデなど、いろいろな品種が知られています。
- ☆ イヌタデのイヌは否 (イナ) が訛 (なま) ったものです。ここで言うタデは水田に生えるヤナギタデ (p128) のことで、かじるとぴりっと辛いことから昔は薬味として利用されてきました。イヌタデは、それに似るものの辛くないため否定の意のイナがつきましたが、山菜として食べることは可能です。

あかのまんま

イヌタデのタネは赤紫色のがくの中にも包まれた状態で熟します。そのため、果実期の穂は赤紫色のツブツブが集まったような姿をしています。かつては、おままごとの赤飯として使われていました。そのことから「あかのまんま」の愛称がつけられています。よく見ると、成熟した黒いタネがところどころから顔を出していて、それが赤飯の豆を良い具合に再現しています。



花が終わった後も穂の赤紫色はしばらく残る

がくは 5 枚



葉先はゆるやかに細くなっていく



托葉鞘よりも長い毛が生える

短い毛がたくさん生える

托葉鞘
OPHELIPSEANT



花は白い

品種

シロバナ
イヌタデ

オオバコ科 クワガタソウ属

イヌノフグリ (犬の陰囊)

Veronica polita Fr. var. *lilacina* (T.Yamaz.) T.Yamaz.

レンドロシテの位置づけ

千葉県



環境省



市内の分布状況

市内の数か所に自生地があります。ただ、いずれも数は少なく、除草作業などふとしたきっかけで姿を消してしまうおそれがあります。



自生環境保護のため
場所は非公開です

自生環境

道ばた、石垣 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



外来種のおオイヌノフグリが広がるとともに、激減しました。また、人里周辺に生えるため、土地改変や除草の影響を受けやすく、イヌノフグリを取り巻く環境は厳しい状況です。

特徴

- ☆ 本州（関東以西）、四国、九州、南西諸島に分布し、道ばたや民家の周辺、石垣のすき間、畑地など、身近な場所に生えます。越年草で、秋に発芽した後は越冬し、早春に開花・結実して一生を終えます。
- ☆ かつては珍しいものではなかったようですが、明治期に外来種のおオイヌノフグリ (p34) が一気に広がると、それに押される形で激減、今や絶滅危惧種となっていました。
- ☆ 花期は2～3月頃です。色は薄いピンクで、おオイヌノフグリに比べるとはるかに小さいためほとんど目立ちません。果実は球を横に2つつけたような形をしていて、これが雄犬の生殖器官(陰囊(いんのう))を連想させることから名前がつけられました。

タチイヌとは共存

イヌノフグリと同じ仲間、野田市の道ばたで最もよく見かけるのは、外来種のおオイヌノフグリとタチイヌノフグリです。イヌノフグリは、おオイヌノフグリに押されて激減してしまいました。ただ、同じ外来種でもタチイヌノフグリとは比較的仲が良いようです。市内の自生地でもイヌノフグリとタチイヌノフグリは一緒に生えていることが多く、どちらかが駆逐してしまうという感じではなさそうです。



花はまだ寒いうちから咲き始める



花はおオイヌノフグリよりも小さい



果実は球を横に2つ並べたような形



葉のギザギザの数はおオイヌノフグリより少ない

ムクロジ科 カエデ属

イロハモミジ (いろは紅葉)

Acer palmatum Thunb.

自生環境

山地の林内

原産地

日本在来

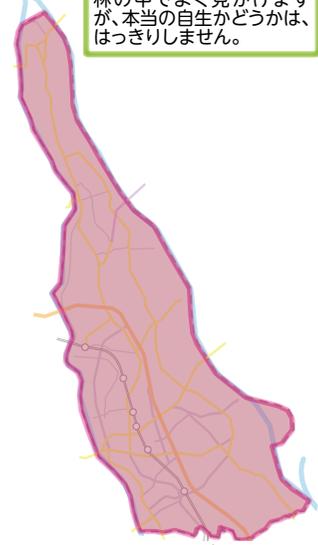
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

庭や公園によく植えられるため、市内のもの大半はそこからの野生化株と考えられます。真の自生があるかは不明ですが、現時点では見守る程度で問題なさそうです。

市内の分布状況

林の中でよく見かけますが、本当の自生かどうかは、はっきりしません。



特徴

- ☆ 日本のカエデは約 25 種あり、その代表選手とも言えるのがイロハモミジです。山地に多く見られる落葉高木ですが、美しい紅葉を楽しむために、庭や公園にもよく植えられます。また、盆栽としても人気があります。
- ☆ 葉は直径 5cm 前後で、手のひら状に深く切れ込みます。切れ込みの数は葉によって若干異なりますが、形は整っていて左右対称になっていることが多いものです。秋の終わりになると鮮やかに紅葉しますが、ときに黄葉となることもあります。
- ☆ 4月頃、芽吹きと同時に開花します。外側の真っ赤ながくが、よく目立ちます。花びらも 5 枚ありますが、がくよりも小さく薄い黄色であまり目立ちません。タネには細長い翼があり、2 個 1 組となつてつきます。成熟すると分離し、翼で風に乗って遠くへと運ばれていきます。

モミジとカエデの由来

草木が色づくことを、古い言葉で「もみづ」と言いました。モミジという呼び名は、この「もみづ」から来ています。草の葉が赤や黄色に染まることを種類に関係なく「草もみじ」と呼ぶのも、おそらくこれが大きく関係していると考えられます。一方で、イロハモミジの仲間は、総称してカエデと言います。これはカエルデ(蛙手)の意味で、葉の形がカエルの手に似ていることになみまします。



イネ科 エノコログサ属

エノコログサ (狗尾草)

Setaria viridis (L.) P.Beauv.

自生環境

道ばた、空き地、河川敷 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

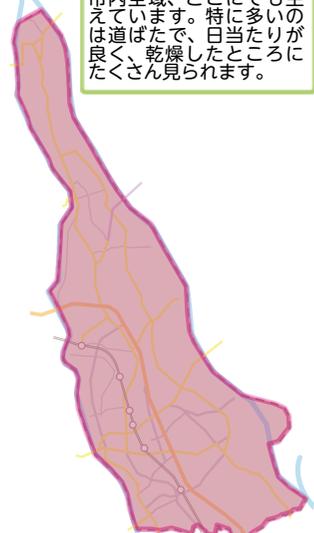
身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

特徴

- ☆ 道ばたや空き地、河川敷など、日当たりが良く乾燥した場所に多く見られます。草丈は数十cm程度ですが、乾燥の著しい場所では 10cmにも満たない大きさで穂を出している姿も見かけます。
- ☆ 穂は剛毛が多く、その色は緑色です。時に紫がかった色の剛毛をつける株もあり、これはムラサキエノコロと呼ばれます。穂は直立し、ほとんど垂れ下がらない傾向があります。
- ☆ エノコログサは雑穀のアワの原種と考えられています。剛毛が多く、食べるツブツブの部分(小穂(しょうすい))も小さいため、アワほど美味ではありませんが、炒めると香ばしく、食べることは可能です。

市内の分布状況

市内全域、どこにでも生えています。特に多いのは道ばたで、日当たりが良く、乾燥したところにたくさん見られます。



二又、三又の穂

エノコログサの穂は、通常枝分かれせずに1本のふさふさとしたしっぽのように見えます。ところが、何らかの理由で途中から枝分かれして、二又や三又の穂ができることもあります。ときに四又、五又…と、数多く枝分かれすることもあります。4つ葉のクローバーと同じような感覚で、こういう穂を探してみるのも面白いです。



穂の枝分かれいろいろ



オオバコ科 クワガタソウ属

オオイヌノフグリ (大犬の陰囊)

Veronica persica Poir.

自生環境

道ばた、野原 など

原産地

ユーラシア大陸

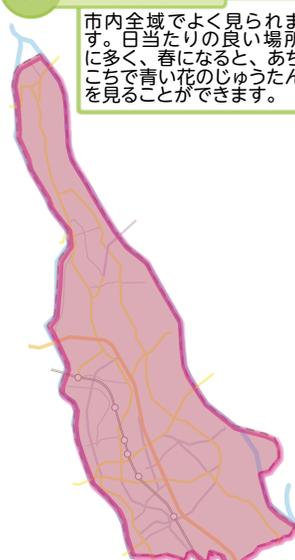
予想される被害



今のところ、生態系に重大な影響を与える雰囲気はありません。ただ、オオイヌノフグリが広がるとともに、かつてよく見られた日本在来のイヌノフグリが激減したという過去があります。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。日当たりの良い場所に多く、春になると、あちこちで青い花のじゅうたんを見ることができます。



特徴

- ☆ ユーラシア大陸の原産で、今は世界中に広がっています。今や春の野辺の定番となっていますが、日本に渡来したのは1880年頃と言われ、昔からあったものではありません。
- ☆ 日が当たるといっせいに開花し、群生している場所では青い花のじゅうたんができて、息を飲むほど美しいものです。主な花期は春ですが、条件さえ良ければ季節に関係なく咲くようで、それ以外の季節でもちらほらと花を見ることがあります。
- ☆ 果実はハート形で、熟すと割れて、中から小さなタネがこぼれ落ちます。このタネの表面はぼこぼこしていて、靴の裏、車のタイヤなどにはさまるようにして運ばれていく傾向があります。

花摘みには向かない

若い頃、陽だまりでオオイヌノフグリの花を摘んで遊んだ人も多かもしれませんね。ところが、オオイヌノフグリの花には、雌しべに花粉がついた瞬間にぼろっと落ちてしまう習性があります。そのため、せっかく摘んでも、ちょっとした振動で受粉が成立してしまい、帰りつく頃には花が全部なくなっていた…という残念なことになります。もっとも、それも含めて良い思い出になるんですけどね。

花は日が当たるといっせいに開く



花びらは4枚あるように見えるが根もとで全部つながっている



葉は縁がギザギザしている



果実は先が少しとがったハートの形



陽だまりでは真冬でも花を咲かせる



キク科 オナモミ属

総合対策
(その他)

オオオナモミ (大雄菜揉み)

Xanthium orientale L. subsp. *orientale*

自生環境

荒地、あぜ、河川敷 など

原産地

メキシコ

予想される被害



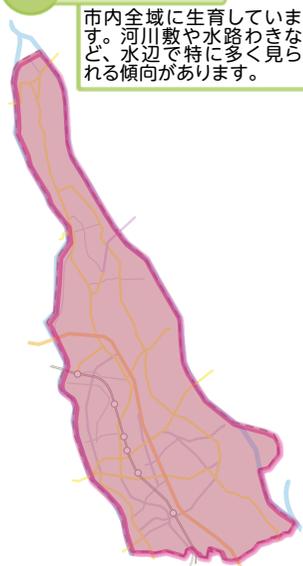
繁殖力が強く、農地に入り込むと、農作物への影響が心配されます。また、もともと日本に自生した在来のオナモミは、オオオナモミによってほとんど駆逐されてしまったと言われています。

特徴

- ★ 荒地に生える1年草で、果実は服によくくっつくため、子どもたちの草花遊びの「道具」として人気があります。果実は軽くて水によく浮くため、水流によってもあちこちに運ばれていきます。そのため、あぜや水路沿い、河川敷など、水辺でもよく見かけます。
- ★ 雌雄同株ですが、雄花と雌花があります。花はとても地味で、受粉を風の力に頼っているため、空気中に花粉をまき散らし、秋の花粉症の原因植物になります。
- ★ もともと日本には在来種のオナモミが自生していましたが、外来種のオオオナモミが広がってからは、すっかり姿を消してしまいました。現在身近な場所で見かけるもののほとんどはオオオナモミで、オナモミは絶滅危惧種になっています。

市内の分布状況

市内全域に生育しています。河川敷や水路わきなど、水辺で特に多く見られる傾向があります。



かぎ爪で引っかかる

オオオナモミの果実は硬くて鋭い刺に覆われています。この刺の先をよく見ると、先端がぐるんとかぎ爪状になっているのが分かります。かぎ爪で、服の繊維や動物の毛などに引っかかるようにしてくっつきます。動物の体にくっついてタネを少しでも遠くまでまき散らそうとする方法を、付着散布と言います。付着散布する植物には、このかぎ爪によってくっつくものも多く存在します。



果実は服によくくっつく

葉は大きくてギザギザと不規則に切れ込む



雄花のあつまり

雌花のあつまり

雄花と雌花が混ざるように咲く



刺の先はぐるんと巻く

果実には長くて鋭い刺がたくさんある

キク科 ノニガナ属

オオジシバリ(大地縛り)

Ixeris japonica (Burm.f.) Nakai

自生環境

野原、水辺、あぜ など

原産地

日本在来

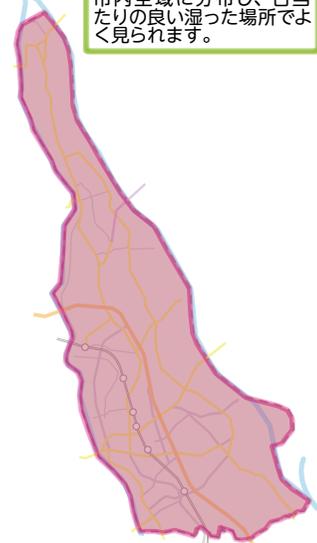
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域に分布し、日当たりの良い湿った場所によく見られます。



特徴

- ☆ 日当たりの良い湿った場所にたくさん生えています。茎は地をはいながら、節々から根を下ろして広がっていきます。大地縛りの名は、この姿が地面を縛りつけているように見えることにちなみます。この茎は途中でちぎれても、ちぎれた断片がそれぞれ新しい株として育っていきます。
- ☆ 春を中心に、直径3 cm くらいの黄色い花を咲かせます。1枚の花びらのようなものが舌状花と言う1つの花で、1つの大きな花のように見えるのはその集合体です。タンポポに比べると舌状花の数は少なく、中心に黒い雄しべと雌しべが目立ちます。春ほどではありませんが、秋にもちらほらと開花します。
- ☆ 茎や葉をちぎると白い「乳汁」が出てきます(乳汁は無毒)。葉は根元に行くにつれ細くなります。秋に気温が下がると紅葉します。

ニガナ属からノニガナ属へ

かつてキク科ニガナ属(*Ixeris*)とされていたグループは、新しい研究で*Ixeris*と*Ixeridium*の2つに分割されました。その際、ニガナの仲間が*Ixeridium*のほうに分けられたため、ニガナ属は*Ixeridium*の日本名となり、*Ixeris*は新たにノニガナ属という日本名が当てられるようになりました。ノニガナ属には、オオジシバリのほか、イワニガナ、カワラニガナ、ノニガナ、ハマニガナなどが属しています。



オオバコ科 オオバコ属

オオバコ (大葉子)

Plantago asiatica L.

総合対策
(重点)
(高い山に生えるもの)

自生環境

道ばた、公園、畑地 など

原産地

日本在来

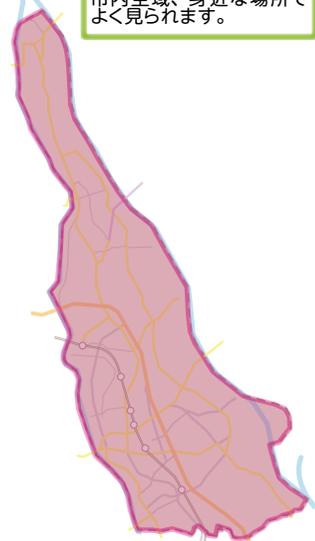
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に育つ野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所でよく見られます。



特徴

- ☆ 身近な場所でよく見られる多年草です。土の道や公園、庭の隅など、人や車がよく通り、大きな草があまり生えていないような場所にたくさん生えています。あえてこういう環境に生えることで、他の植物との競争をうまく回避しています。
- ☆ 大葉子という名前のもとにもなっている、大きくて幅の広い葉が目立ちます。一見すると容易に破けてしまいそうですが、硬い筋状の葉脈が何本も通っていて強度は抜群です。葉の表面ははふつう無毛ですが、毛の量には個体差があります。
- ☆ 花茎も多数の筋が通っていて、しなやかで頑丈です。この花茎を絡めて引っ張り合い、ちぎれた方が負けという「おおばこ相撲」で遊んだ経験のある人も多いことでしょう。

靴裏やタイヤとともに

人や車がよく通る場所を好んで生えるオオバコは、踏まれることを逆にとって、タネを拡散させるための方法として利用しています。タネは濡れるとベタベタし、靴裏やタイヤによくくっつきます。そして人の移動とともにあちこちへと運ばれていくのです。近年は、観光客の車や靴裏についてきたタネが、貴重な自然が残されている国立公園の遊歩道や登山道で芽生え、繁茂して問題となっています。



ロゼット… 植物が冬を越すため、地面にべったり張りつくように葉を広げる形のこと。太陽の光をたっぷり浴び、冷たい風を避けることができる。

ラン科 ツレサギソウ属

オオバノトンボソウ (大葉の蜻蛉草)

Platanthera minor (Miq.) Rchb.f.

自生環境

山林

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



やや自然度の高い山林に生えます。ただ、最近はササ類の繁茂や不法投棄で林内が荒れたり、山林そのものが開発されたりと、市内の生育状況はあまり良好とは言えません。

市内の分布状況

市内の山林内に自生がありますが、数はそれほど多くはありません。

自生環境保護のため
場所は非公開です

特徴

- ☆ 里山～低山地の林内に生える多年草で、ノヤマトンボやノヤマノトンボソウなどの別名があります。土の中の微生物（いわゆるラン菌）と共存しており、相性の良い種類のラン菌がいる場所でのみ生育が可能です。
- ☆ 葉は深緑色で、やや幅が広い楕円形です。茎は直立し、30～50cmくらいにまで伸びます。初夏、茎の上部に薄い黄緑色の花が何個も咲き、まばらな穂となります。
- ☆ 花の後、細長い果実ができ、その中に粉のようなタネがびっしりと詰まっています。通常、タネの中には発芽に必要な養分も蓄えられていますが、オオバノトンボソウをはじめとするラン科植物のタネにはそれがありません。そのため、発芽には相性の良いラン菌の力を借りる必要があります。

植物名に昆虫が…

ラン科の植物は、花の形がとても複雑で、ユニークな種類が多いのが特徴です。トンボソウもそのひとつで、花の形がまるでトンボの飛び姿に見えることから名前が来ています。ミズトンボ、ムカゴトンボなど、名前にトンボが入るランは案外多いものです。他にもコオロギラン、ジガバチソウ、スズムシソウなど、ユニークな形の花を昆虫に見立てて、名前がついたものも少なくありません。



7月頃に
小さな
黄緑色の
花を
まばらに
咲かせる

茎につく葉は
細くて小さい



花はまるで
飛んでいる
トンボのよう

この中に
粉のような
タネが
びっしりと
詰まっている



株もとの葉は
深緑色で幅が広い



茎は
まっすぐ
上へと
立ち上がる

キク科 ブタクサ属

総合対策
(重点)

オオブタクサ(大豚草)

Ambrosia trifida L.

自生環境

河川敷、荒地、畑地 など

原産地

北アメリカ

予想される被害



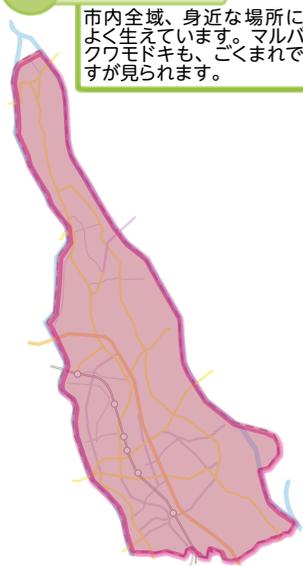
秋の花粉症の主因です。また、繁殖力が非常に強く、背の高い草やぶをつくるため、地域の生態系に壊滅的な打撃を与えるほか、農地に侵入すると厄介な存在となります。

特徴

- ★ ブタクサと同様に、北アメリカ原産で、温帯を中心に世界の広範囲に広がっています。国内では、1952年に清水港(静岡県)と千葉市で発見されたのを皮切りに、あっという間に全国へと広がりました。現在はセイタカアワダチソウなどとともに、いたるところで背の高い草やぶを形づくっています。
- ★ 1年草で株の寿命はせいぜい半年程度ですが、成長がとても早く、4~5月頃にタネから発芽してからあっという間に大人の背丈以上になります。ときに5m近くに達することもあります。茎も、まるで樹木のように太く硬くなります。
- ★ 夏から秋にかけ、茎の先に長い雄花の穂をつけ、そこから大量の花粉をまき散らします。そのため、秋の花粉症の代表的な原因植物となっています。雌花は雄花の穂のつけ根で、緑色の苞(ほう)に包まれるようにして咲きます。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所によく生えています。マルバクワモドキも、ごくまれですが見られます。



ブタクサの天敵が登場

持ち前の繁殖力の強さから、飛ぶ鳥を落とすような勢いで広がり、各地で猛威を振るっているオオブタクサ。ここに来て天敵が登場し、かげりが見え始めています。天敵の名前はブタクサハムシ。北アメリカ原産のハムシ科の昆虫で、1996年に千葉県で発見されてから全国へと拡散。ただ、オオブタクサにとどまらず、ヒマワリなどのキク科植物も食べるため、手放しでは喜べません。



イネ科 ススキ属

オギ (荻)

Miscanthus sacchariflorus (Maxim.) Benth. et Hook.f. ex Franch.

自生環境

水辺、河川敷 など

原産地

日本在来

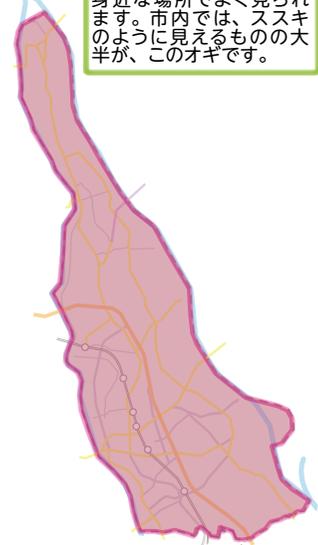
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

身近な場所でよく見られます。市内では、ススキのように見えるものの大半が、このオギです。



特徴

- ☆ 水辺によく生え、長い地下茎を張り巡らしながらどんどん増え、オギ原という茂みをつくります。オギはススキ (p75) のようにこんもりとは茂らず、上にと上にと茎が立ち上がり、背の高い草やぶを形成します。ただ、たびたび草刈りが行われる場所では、ススキと紛らわしい状態になることもあります。
- ☆ 秋になると、茎の先にススキに似た花の穂を出します。オギの茎は、茎の先端近くにまで葉がつく傾向があります。穂は毛が多いものの、ススキのような芒はありません。タネが成熟すると穂の毛はふわふわになり、風に乗ってあちこち運ばれていきます。
- ☆ オギやヨシの原っぱは、水辺の生きものの生活場所としてとても大切です。市内では利根川や江戸川の河川敷に広大な群落がありますが、近年は乾燥化が進み、セイタカアワダチソウなどの外来種が増えてしまっているところが目立ちます。

ススキとは環境が異なる

ススキもオギも、同じ仲間 (イネ科ススキ属) に分類され、穂の形はとてもよく似ています。ただ、両者は生えている環境が異なります。ススキが日当たりの良い乾燥した草原に多いのに対し、オギは河川敷や沼のほとりなど、やや湿った場所に群生し、しっかりとすみ分けがなされています。なお、土の水分量がさらに増えるとヨシやガマの割合が多くなっていきます。

秋になるとススキによく似た穂を出す

茎の上のほうにも葉がつく

穂は毛がたくさん生えているものの芒はない

葉の縁は硬く糸鋸のような細かい刺がある

茎は立ち上がりしばしば2m以上の高さになる

株元のようしよう葉鞘に硬い毛がびっしり生える



オシロイバナ科 オシロイバナ属

オシロイバナ (白粉花)

Mirabilis jalapa L.

自生環境

道ばた、畑地 など

原産地

熱帯アメリカ

予想される被害



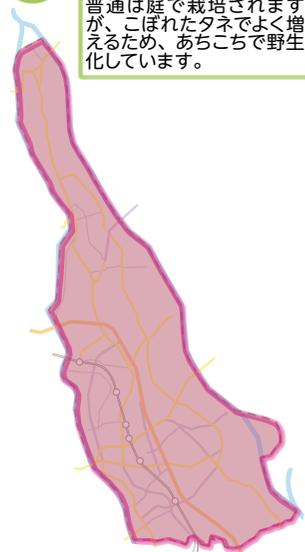
もともとは庭の花でしたが、あちこちで野生化しています。今のところは比較的小おとなしいのですが、気候の温暖化が進むと、旺盛に繁茂するようになる可能性があります。

特徴

- ☆ 世界中で栽培されている園芸植物で、日本には江戸時代以前に渡来したと言われています。熱帯地方からやってきた植物であるため寒さは苦手ですが、市内でも越冬はできているようです。霜が降りると地上部は溶けるように枯れてしましますが、根茎が生きています。
- ☆ 花は夜咲きで、だいたい午後 4 時ごろから咲き始めることから、英語名はずばり four-o'clock と言います。暑いうちは朝が来るとともにしぼんでしましますが、涼しくなると午前中も花が開いたままとなります。
- ☆ タネは苞に包まれた状態で成熟します。完熟すると苞が星形に開いて、真っ黒に熟したタネが顔を出します。タネの表面には細かいしわがびっしりと刻まれています。

市内の分布状況

普通は庭で栽培されますが、こぼれたタネでよく増えるため、あちこちで野生化しています。



お化粧品ごっこができる

オシロイバナのタネは真っ黒ですが、割ると中から「白い粉」が出てきます。これを肌につけて伸ばすと、まるで「おしろい」を塗ったかのように白くなります。オシロイバナの名前はここに由来します。この白い粉の正体は胚乳、つまり発芽のために備蓄してある養分です。ただ、オシロイバナは有毒植物です。肌に塗って遊ぶぶんには問題ありませんが、口に入れないほうが良いでしょう。



花には花びらはなく花びらのような部分はがくでがくのような部分は苞



タネはつぶすとおしろいのような白い粉が出てくる



ふたばは横長でゆがんだ形



オシロイバナは花色のバリエーションが豊富



翌日の昼間に花はしぼむ



葉は少し肉厚で先がとがる



苞もがくのようになる

品種 フタエオシロイバナ

キク科 オニタビラコ属

オニタビラコ (鬼田平子)

Youngia japonica (L.) DC.

自生環境

道ばた、野原、林縁 など

原産地

日本在来

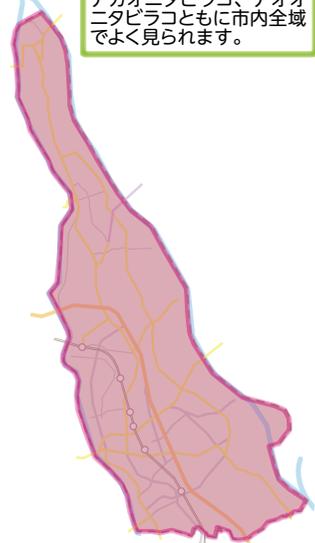
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

アカオニタビラコ、アオオニタビラコともに市内全域でよく見られます。



特徴

- ☆ 今までオニタビラコとされてきた植物は、新しい研究によってアオオニタビラコとアカオニタビラコの2つの亜種に分けられました。アオオニタビラコ、アカオニタビラコともに、市内ではいたるところで見ることができます。
- ☆ アオオニタビラコは、道ばたや公園など街っぽいところに多い傾向がある多年草です。葉は深緑色で、やや光沢があります。細い茎を何本も立ち上げ、その先に小さな黄色い花を咲かせます。花は、季節に関係なく咲き続ける傾向があります。
- ☆ アカオニタビラコは野原や畑地などに多い越年草で、茎や葉は毛が多く、全体的に赤みがかった色をしています。春になると太い茎が1本立ち、その先に多数の花がかたまっても咲きます。ときに細い茎が2~3本出ることがありますが、主となる太い茎が必ず1本あります。

アオのほうが基本種

今までオニタビラコと呼ばれていた植物は、最近アオオニタビラコ (subsp. *japonica*) とアカオニタビラコ (subsp. *elstonii*) の2つの亜種に分けて呼ぶようになりました。また、アオオニタビラコとアカオニタビラコの間中間的な姿をしたものは、両者の雑種と考えられており、アイオニタビラコの名で呼ばれています。分類上、アオオニタビラコがこれらの基本種(基準亜種)として扱われています。

アオオニタビラコ



茎は細く
株元から
何本も立つ



葉は少し青みがかった
緑色でやや光沢がある

アカオニタビラコ



春に
太い茎が
1本立ち
その先に
花を
咲かせる



葉は赤みがかった
色のことが多い



アオと
アカの
中間型

アイ オニタビラコ



総苞

総苞は
細長い

タネは白い
綿毛がある

キク科 ノゲシ属

オニノゲシ (鬼野罌粟)

Sonchus asper (L.) Hill

自生環境

道ばた、畑地 など

原産地

ヨーロッパ

予想される被害



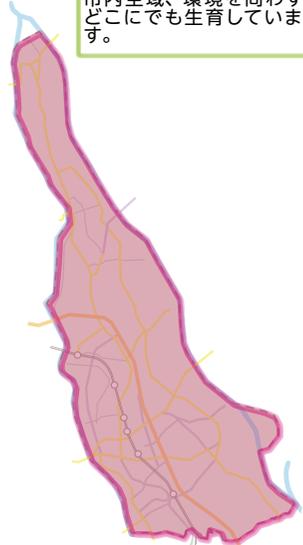
各地で旺盛に繁茂し、他の在来種の生育場所を奪う原因になっています。また、在来種のノゲシとの間にアイノゲシという雑種ができます。アイノゲシは市内にも見られます。

特徴

- ☆ 原産地はヨーロッパですが、今や世界中に広がっています。小さな黄色いタンポポのような花を茎の先に次々と咲かせます。主な花期は春～夏ですが、季節に関係なく咲き続ける傾向があります。
- ☆ 日本在来種のノゲシ (p99) と比べると、葉が硬くて光沢があり、縁は刺々しい姿をしています。名前の鬼もそんな姿が由来となっています。葉は茎を抱き、横から見るとぐるりと巻いているように見えるのが特徴です。
- ☆ 茎に赤茶色の毛が生えるタイプをケオニノゲシ、毛の無いタイプをケナシオニノゲシ (本来の意味でのオニノゲシ) と区別することもあります。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずどこにでも生育しています。



雑種のアイノゲシ

日本在来のノゲシ (ハルノゲシ) とオニノゲシの間には、アイノゲシと呼ばれる雑種ができることがあります。アイノゲシは、ハルノゲシとオニノゲシを足して2で割ったような姿をしていて、タネはできません。ノゲシとオニノゲシは同じような場所に混じるようにして生えるため、ていねいに探すと市内でもあちこちで見ることができます。



小さなタンポポのような花がたくさんつく



若い株も葉の縁が細かくギザギザしている



茎の葉を横から見るとぐるりとまわりこんでいる



茎に毛が多い

品種

ケオニノゲシ

イネ科 オヒシバ属

オヒシバ (雄日芝)

Eleusine indica (L.) Gaertn.

自生環境

道ばた、公園 など

原産地

日本在来

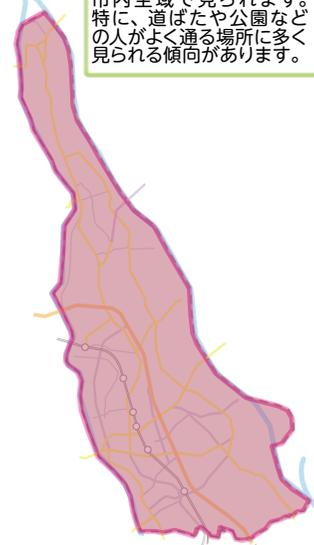
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域で見られます。特に、道ばたや公園などの人がよく通る場所に多く見られる傾向があります。



特徴

- ☆ 道ばたなどで、人や車の往来があり、踏みつけの影響で、あまり他の植物が生育できないような場所によく生えています。茎や葉、穂は頑丈で、踏まれても簡単には折れたりつぶれたりしません。特に、株元はかなり硬くなっています。
- ☆ 何本かの平べったい穂が放射状につきます。穂の本数は茎によってまちまちですが、2～6本程度のもが多いようです。まれに10本以上つくものや、1本だけのものもあつたりします。
- ☆ 野田市ではほとんど栽培されていませんが、雑穀として畑に作られるシコクビエは、分類上オヒシバと同じ仲間です。

踏まれる場所が好き

人や車がよく通る場所はあまり植物が生えず、土がむき出しになっています。通常、植物は踏みつけに弱く、こういう場所ではあまり生育できないのが原因です。ところが中には、あえてそういう場所に進出する植物もいます。オヒシバもそのひとつで、体を頑丈にするなど、踏みつけへの耐性を身につけることで、他の植物との競合をあまり気にせずに、自分の場所をゆつたりと確保しています。

全体的に太くて頑丈な印象がある



薄い黄色の丸い粒が雄しべ、紫色の糸のような部分が雌しべ



穂はほうきのように放射状に広がる



株もとは白く平べったい

オモダカ科 オモダカ属

オモダカ (面高)

Sagittaria trifolia L.

自生環境

水田、池や沼 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

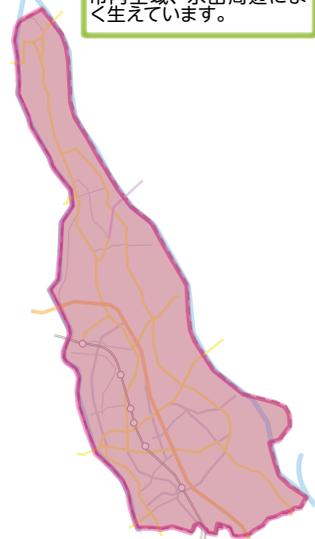
身近な場所でもよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

特徴

- ☆ 稲作農家の間では、昔から言わずと知れた水田雑草です。稲と稲の間から矢じり形の葉をにゅっと伸ばし、白い花を咲かせる姿は、夏の田園風景のひとつとしてすっかりおなじみになっています。極端に葉が細いものをホンバオモダカと呼ぶことがあります。葉の幅は株によってずいぶん異なります。
- ☆ 花は白色で、花弁は3枚です。雌雄同株ですが、1つの穂に雄花と雌花が混じってつきます。果実は平べったくて軽く、水に浮いて遠くまで運ばれていきます。
- ☆ 秋になると、地中で横に長く伸びる枝を出し、その先に新しい球根をつくって、それで冬越しします。

市内の分布状況

市内全域、水田周辺によく生えています。



クワイニオモダカ

正月のおせち料理に使われるクワイの球根。球根の先に角のような芽が出る姿から「めでたい」縁起の良い食べ物とされています。球根の色から青クワイ、白クワイに分けられ、それとは別に大阪で栽培される吹田クワイという品種も存在します。クワイは、分類学上はオモダカと同一种です。全体的にオモダカに比べると大型で、あまり開花しない株が多い傾向があります。



白い花が穂になって咲く

葉は矢じりのような形



雄花

中心は黄色



雌花

中心は薄い緑



果実



球根は大きく角のような芽がつく

栽培品

クワイ

ナデシコ科 ミミナグサ属

オランダミミナグサ(オランダ耳葉草)

Cerastium glomeratum Thuill.

自生環境

道ばた、畑地 など

原産地

ヨーロッパ

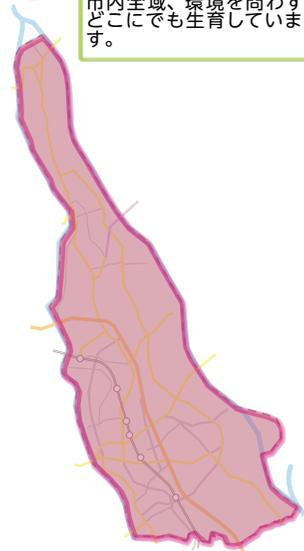
予想される被害



同じ仲間である日本在来のミミナグサは、オランダミミナグサの渡来後、急速に数を減らしてしまいました。また、今後、両者の間で交雑が起きる可能性も否定できません。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずどこにでも生育しています。



特徴

- ☆ 環境適応力や繁殖力の強さから、ほぼ世界中に広がっている小型の越年草です。葉のふわふわした感触や形が、動物の耳を連想させるため、耳葉草という名があります。
- ☆ 秋に発芽し、青々とした葉をつけた状態で越冬、暖かくなってから白い花を咲かせ、タネをこぼしてから枯れるという生活サイクルを送っています。ただ、陽だまりでは、秋から冬にかけてもちらほらと花を見ることがあります。
- ☆ 道ばたなどでは、1年中発生し、季節に関係なく閉鎖花(つぼみのような状態のまま開かず、中で自家受粉させてタネをつくるもの)をつけるような株も多く見られます。これは、植物にとって過酷な都市環境でも確実に世代をつなぐための作戦のひとつと考えられます。

冬は霜衣でオシャレ

草木が霜で覆われることを、まるで霜の衣を身にまとったようだとして霜衣(しもごろも)と表現します。霜は草の表面に生える毛に付着しやすい傾向があります。オランダミミナグサは、触るとふわふわもこもこ感じるくらい、茎や葉の表面に毛が密に生えるため、そのぶん霜の結晶がよくつきます。冬の朝、霜衣でオシャレしたオランダミミナグサを皆さんも探してみてくださいね。



ひょっとこの口のような形でこの先からタネがこぼれる

花びらは5枚で白色

動物の耳に似た形の葉がつく



葉は毛が多くふかふかしている



毛の部分に霜がつきやすく冬の朝はとってもきれい



道ばたでは1年中タネをこぼす

キク科 タンポポ属

総合対策
(重点)

外来タンポポ種群 (外来蒲公英種群)

Taraxacum spp.

自生環境

道ばた、公園、野原 など

原産地

ヨーロッパ など

予想される被害



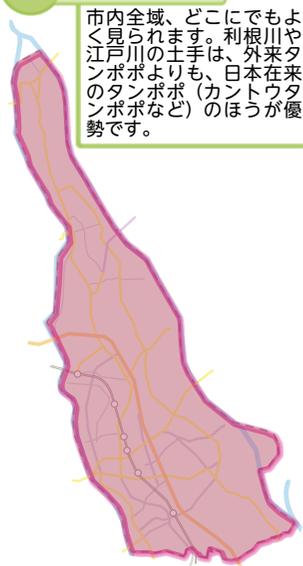
人間活動の影響を受けた場所で、在来タンポポよりも先に侵入して、場所を陣取ってしまいます。また、在来タンポポとの間で雑種をつくり、遺伝子のかく乱を引き起こします。

特徴

- ☆ 普段目にするタンポポのほとんどが外来種、もしくは在来タンポポ (カントウタンポポなど) との交雑種です。かつてはセイヨウタンポポが主でしたが、今は複数の種類が入り込んでいると考えられるため、それらをまとめて外来タンポポ種群と呼ぶようになりました。
- ☆ 環境適応能力が強く成長も早いいため、市街地から自然豊かな里山環境まで、どこにでもよく生えています。
- ☆ 花は1年中咲き続けるものも多く、受粉せずともタネをつくることができます。花を横から見たとくに見えるがくのような部分 (総苞) は、外側にある総苞片がぐるんと反り返るのが普通ですが、最近はそうとも限らなくなってきました。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。利根川や江戸川の土手は、外来タンポポよりも、日本在来のタンポポ (カントウタンポポなど) のほうが優勢です。



多様な外来タンポポ

タンポポの種類は非常に多く、イギリスだけでも100種類以上が知られています。日本にも、複数の種類の外来タンポポが入り込んでいるようで、ていねいに調べると、さまざまな特徴を持った株が見つかります。市内には、カントウタンポポのように総苞片がまったく反り返らないタイプ (ニセカントウタンポポ) や、タネの色が赤っぽいタイプ (アカミタンポポ) などがあります。



そうほうへん
総苞片の反り返り具合や色や形はさまざま



タネの色は茶色が多い

長い柄の先に綿毛がついている

赤っぽい色のタネをつける種類もある

カタバミ科 カタバミ属

カタバミ (傍食)

Oxalis corniculata L.

自生環境

道ばた、公園、庭の隅 など

原産地

日本在来

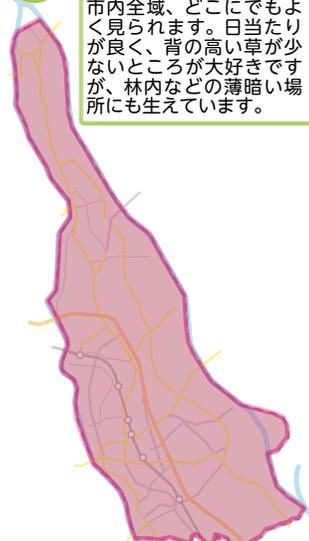
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。日当たりが良く、背の高い草が少ないところが大好きですが、林内などの薄暗い場所にも生えています。



特徴

- ☆ 道ばたや庭、公園などの日当たりの良い場所によく生え、地面を覆うように広がっていきます。小さなハート形の葉が3枚ずつつきます。花は黄色で、花弁は5枚あります。
- ☆ 熟した果実は、軽く触れただけで勢いよくパチンと弾け、辺りにタネをまき散らします。また、タネには「アリの好物」がついていて、これを運び賃として提供することで、アリのタネを遠くまで運んでもらっています。
- ☆ 葉は山菜として利用できますが、シュウ酸を含むためにかじると酸味を感じます。
- ☆ この仲間は総称してオキザリスと呼ばれ、さまざまな種類が観賞用に栽培されます。カタバミは日本のオキザリスです。

赤紫色のカタバミ

典型的なカタバミの葉は緑色ですが、莖や葉の色が赤紫色の株もよく見られます。これをアカカタバミと言います。また、緑色と赤紫色を足して2で割ったような色合いの葉をつける株もあり、これをウスアカカタバミと言います。アカカタバミの花は黄色ですが、「のど」の部分に赤い輪のような模様ができる傾向があります。



茎は地面をはうことが多い

ハート形の葉が3枚ずつついている



熟した果実は触ると弾けて中からタネが勢いよく飛び出す

果実は先がつんととがった形



ウスアカカタバミ

品種

品種

アカカタバミ

アサ科 カラハナソウ属

カナムグラ (鉄葎)

Humulus scandens (Lour.) Merr.

自生環境

荒れ地、河川敷 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

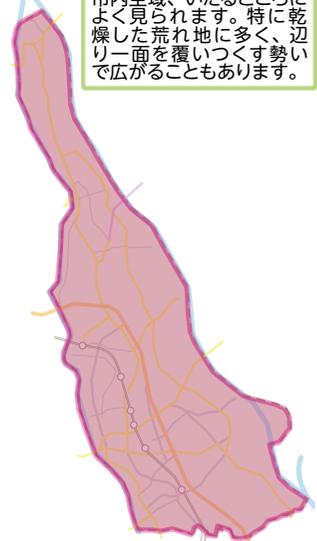
身近な場所でもよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

特徴

- ☆ 日当たりの良い乾燥した荒れ地によく生えるつる草です。1年草ですがとても成長が早く、辺り一面を覆いつくす勢いでつるを伸ばしていきます。茎や葉にはずり落ちるのを防ぐための下向き刺が多数あり、うかつに触ると肌を切ってしまうほどの鋭さがあります。
- ☆ 雄株と雌株があり、花の形が異なります。雄株は小さな雄花をたくさんつけた花の穂を出し、大量の花粉を空中にまき散らします。雌花は小さなホップを連想させる形をしています。
- ☆ カナムグラは空気中に花粉をまき散らす風媒花で、オオブタクサ (p39) などとともに秋の花粉症の主要な原因植物となっています。

市内の分布状況

市内全域、いたるところによく見られます。特に乾燥した荒れ地に多く、辺り一面を覆いつくす勢いで広がることもあります。



キタテハが集う草

カナムグラは辺り一面を覆いつくすほどに繁茂し、刺が痛い上に秋の花粉症の主要な原因植物なので、どちらかと言えば嫌われ者の草です。一方で、キタテハというタテハチョウ科のチョウにとっては、必要不可欠な草です。キタテハの幼虫にとって、この草の葉は大切な食べ物だからです。カナムグラの覆っている場所には、何匹ものキタテハが飛び交っている姿を見ることができます。



葉は手のひらのような形



雄しべを揺らすと煙のように花粉が出てくる



雄株は小さな花をたくさん咲かせる



雌花の白い糸のような部分が雌しべ



果実は小さなホップのよう



ガマ科 ガマ属

ガマ (蒲)

Typha latifolia L.

自生環境

湿地、水辺 など

原産地

日本在来

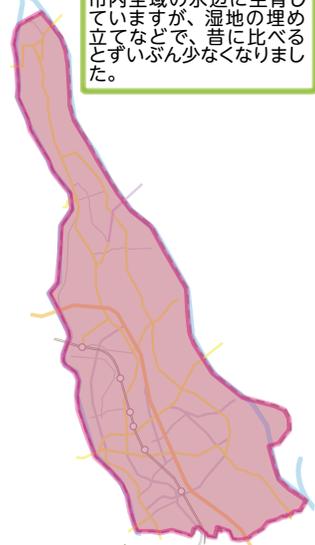
生育を脅かす要因



水辺に多く、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、ガマの生える場所は埋め立てや河川改修など、人間活動の影響を受けやすい傾向があるため、油断はできません。

市内の分布状況

市内全域の水辺に生育していますが、湿地の埋め立てなどで、昔に比べるとずいぶん少なくなりました。



特徴

- ☆ 湿地や沼のへりなど、比較的水深の浅い場所に生える多年草です。太い地下茎をどんどん横に伸ばし、しばしば辺り一面の群生となります。
- ☆ 早ければ5～6月頃から花の穂が付き始めます。はじめ苞と呼ばれるものにくるまれています。開花とともに苞は自然に脱落します。花の穂は上下に分かれ、上が雄花の穂、下が雌花の穂になっています。雄花の穂は開花とともに大量の黄色い花粉をまき散らします。
- ☆ 雌花の穂は受粉すると、成熟しながら次第にこげ茶色になり、ソーセージのような独特の姿となります。この穂は晩秋～初冬にかけて弾け、綿毛つきのタネを大量に飛ばします。

白うさぎを救った草

ガマの花粉は蒲黄(ほうおう)と言い、止血剤になります。その薬効は、かなり古くから知られていて、日本最古の歴史文学書『古事記』内の「因幡(いなば)の白兔」という神話にも出てきます。そこに登場する白うさぎは、毛皮を全部はがされて赤裸の状態で泣いていました。通りかかった大国主命(おおくにぬしのかみ)という神様に教えられ、ガマの花を摘んで寝転ぶと、毛が生えて元通りになったとのこと。



開花前の穂は苞にくるまれている



黄色い花粉を大量にまき散らす雄花の穂

この部分は離れない

雌花の穂 薄い緑色で円柱形



穂は熟すとこげ茶色になる



やがて弾けて大量の穂綿が飛び散る

穂綿の正体はとても小さな綿毛つきのタネ